



初期カール・シュミット（Karl Schmidt, 1819-1864年）の研究史的意義づけ
（シュミット著作目録（1845-1863年）補訂版添付）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 伊知朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006170

初期カール・シュミット (Karl Schmidt, 1819-1864年) の研究史的意義づけ (シュミット著作目録 (1845-1863年) 補訂版添付)

田村 伊知朗

北海道教育大学教育学部函館校 (政治学研究室)

Die Einleitung zur Bibliographie der Veröffentlichungen von Karl Schmidt (1845-1863) im Zusammenhang mit der Forschungsgeschichte der Hegelschen Linke

TAMURA Ichiro

Department of Political Science, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本稿の目的は、カール・シュミット (Karl Schmidt, 1819-1864年) に関する研究史を概観することにある。初期シュミット研究の必然性が、初期ブルーノ・バウアーそして他のヘーゲル左派に関する研究史において討究される。次に、初期シュミットに関与するかぎり、後期シュミットに関する研究史が触れられる。本稿には、補訂された著作目録が添付されている。それは、現段階におけるシュミット研究の水準を端的に表現している。

1. はじめに

本稿の目的は、カール・シュミット (Karl Schmidt, 1819-1864年) に関する研究史を概観することにある。初期シュミット研究の必然性が、初期ブルーノ・バウアーそして他のヘーゲル左派に関する研究史において討究される。次に、初期シュミットに関与するかぎり、後期シュミットに関する研究史が触れられる。本稿には、補訂された著作目録が添付されている。それは、現段階におけるシュミット研究の水準を端的に表現している。

初期シュミットは、ヘーゲル左派研究史において周辺ヘーゲル左派とみなされている。ヘーゲル左派研究史における周辺という概念、ならびにその対概念である中心という概念は、まさにヘーゲル左派という概念と密接に関連している。この問題は、最近の拙稿において詳細に論じているので、ここでは最小限次のことだけに限定して述べてみよう。¹ すなわち、ヘーゲル左派研究の主要目的は、初期マルクス、初期エンゲル

1 田村伊知朗「初期テオドール・オーピッツ研究の基礎構築——ヘーゲル左派研究史におけるテオドール・オーピッツ初期著作目録 (1842-1850年) の意義」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』第63巻第2号, 2013年, 30頁参照。

スの思想環境に関する研究の媒介項として位置づけられていた。研究対象が、彼らと思想的交流があったヘーゲル左派、つまりフォイエエルバッハ、ルーゲ、ヘス、ブルーノ・バウアー等に限定された。社会主義の創立者との関係性が判断基準になり、この関係から逸脱した思想家群は周辺ヘーゲル左派として研究対象から除外された。ヘーゲル左派の独自の意義を検証するという前提が、社会主義の創立者との関係の有無に依存していた。

彼らとの関係がヘーゲル左派研究を規定してきたことによって、その概念規定における偏向が生じる。周辺ヘーゲル左派群像のなかでも、とりわけブルーノ・バウアーの純粹批判の哲学を受容した所謂「シャルロットンブルク神聖家族」構成員は、このような観点から不当に貶められた。初期マルクス、初期エンゲルスがその『聖家族』と『ドイツ・イデオロギー』において、彼の純粹批判を嘲笑の対象として根底から批判したからである。この批判によって、「神聖家族」構成員、とりわけエトガー・バウアー (Edgar Bauer, 1820-1886年)、テオドル・オーピッツ (Theodor Opitz, 1820-1896年)、ヘルマン・イエリネク (Hermann Jellinek, 1823-1848年)、カール・フリートリヒ・ケッペン (Karl Friedrich Köppen, 1808-1863年)、そして本稿の対象であるカール・シュミット等は、研究対象から除外された。次節以下で詳細に述べる例外を除いて、この傾向は同時代だけではなく、前世紀末まで継続した。彼らに関する個別的研究こそが、ヘーゲル左派研究史における埋められるべき深淵の一つである。本稿もまた、この深淵を埋めるための一連の環に属している。

周辺ヘーゲル左派とりわけ「神聖家族」構成員は、その名前を三月革命以後のドイツ精神史において刻印した。まず、エトガー・バウアーは19世紀後半においてシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題というドイツ外交史における重要な問題に対して、デンマーク王国の側に立って論陣を張る。² また、コペンハーゲン警察署長に対して、19世紀中葉の革命運動に関する報告書を送付する。³ この秘密報告書は、当時のドイツ人亡命者集団に関する史料として第一級の価値を有している。

オーピッツは革命敗北以後、ロシアの国民詩人アレクサンドル・プーシキン、及びポーランドの革命詩人サンドル・ペテフィ等の詩のドイツ語翻訳家としてその名前を残す。また、『マリア・スチュアート』等による自身の詩作活動によって、ドイツ近代文学史においてもその名前を残す。⁴

ケッペンは仏教をドイツへと紹介し、キリスト教に代わる宗教的選択肢を提示した。「ケッペンの仏教学は、今日なお意義深い業績であろう」。⁵ 彼の仏教理解は、ヒンディ語ではなく、フランス語と英語という翻訳文献による解釈という制限性を持っていたが、その当時の第一級の業績であったことは否定できない。

イエリネクは、三月革命をウィーンにおいて迎える。そこで彼は、ハプスブルク王朝によって統治され、前近代的水準にあったオーストリアの社会的、政治的状态を『急進派』等の雑誌において批判する。⁶ R・ブルームと同様に、彼はこの批判的記事によって革命敗北以後の軍事法廷において死刑を宣告され、その生涯を閉じる。

最後に、本研究の対象であるシュミットは、教育思想史研究者としてドイツ精神史においてその名前を刻む。とりわけ、フレーベル主義者として、19世紀中葉までの教育学史を総括した『世界史的発展と諸民族の文化的生活との有機的連関における教育学の歴史』全4巻 (1860-1862年) を発表する。⁷ 本書は教育思想史

2 Vgl. [E. Bauer]: Das Herzogthum Holstein und seine Rechte. Eine Denkschrift für die holsteinische Stände-Versammlung. Von einem Preußen. Berlin 1863.

3 Vgl. hrsg. v. E. Gamby: Konfidentenberichte über die europäische Emigration in London 1852-1861. Trier 1989.

4 Vgl. Th. Opitz: Maria Stuart. Nach den neuesten Forschungen dargestellt. Freiburg im Breisgau 1879.

5 F. Mehring: Einleitung des Herausgebers. In: Hrsg. v. F. Mehring: Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels. 1841-1850. Bd. 1. Stuttgart 1902, S. 40.

6 Vgl. hrsg. v. A. J. Becker: Der Radikale. Abend-Zeitung für das In- und Ausland.. Nr. 1-111. Wien 1848.

の分野における基本的文献として、今日でもなお参照を要求されている。彼はまた、督学監としてザクセン・ゴータ公国の教育改革の中心になる。ドイツ教育学史だけではなく、教育行政史においてもその名前が刻まれている。周辺ヘーゲル左派とりわけ「シャルロッテンブルク神聖家族」の構成員は、ドイツ三月革命期及びその敗北以後の19世紀後半においてドイツ精神史の各領域においてその名前を刻んだ。

一般化して言えば、ある思想家における初期思想の研究は、その後期思想の解釈という観点から重要である。後期マルクス研究と初期マルクス研究の関係が想起されるとき、この意味はより明瞭になろう。後期マルクスに対する研究者の関心の中心は、『資本論』の解釈にある。初期マルクス研究が『資本論』形成史として開始されたことは、ここでも想起されるべきであろう。19世紀後期のドイツ精神史において名前を刻んだヘーゲル左派の思想形成過程において、前期の思想と後期のそれは1848年革命を境として、どのように境界づけられるのであろうか。どのような観点から両者は対立的なものとして区別されるべきであろうか。両者は完全に無関係であり、完全に別の思想として考察されるべきであろうか。

シュミットを事例として挙げれば、後期シュミットが多くの自伝を執筆し、自己の思想形成過程を考察している。⁸ ヘーゲル哲学、ブルーノ・バウアーの思想、とりわけ純粹批判が、彼の思想形成過程においてどのように受容され、それが有機体的な教育観とどのように関連したかが問題にされている。ヘーゲル哲学と純粹批判が、彼の教育哲学の土台に横たわっている。

また、ヘーゲル左派としての自己の思想に関する総括書も、三月革命以後に出版されている。⁹ 青年期の思想を総括し、それを出版するためには、時間の経過が必要とされる。次節以下において、シュミットの思想に関する研究史的意義の一端を明らかにする。

2. 初期ブルーノ・バウアー研究史

本節では初期シュミット研究の意義を、初期ブルーノ・バウアー研究という観点から跡づけてみよう。まず、ブルーノ・バウアーの死後の19世紀末から20世紀初頭の文献について触れてみよう。後期バウアーがその死の直前まで編集長として関与した『国際月刊雑誌』において、E・シュレーガーがその包括的伝記ならび思想的概観を提示した。¹⁰ それは、後期バウアー研究の観点から副次的に初期バウアーの研究史的意義を概観している。また、M・ケーゲルが初期バウアーの思想的変遷を哲学史的に考察している。¹¹ 彼の業績の意義は、初期バウアーの著作を時系列的に分析している点にある。彼は、バウアーのヘーゲル右派からヘーゲル左派への変遷を哲学史において再検討しようとした。また、G・ルンツェの業績は、バウアーの宗教批判の意義を神学批判の位相において基礎づけようとする。¹²

7 Vgl. K. Schmidt: Die Geschichte der Pädagogik in weltgeschichtlicher Entwicklung und im organischen Zusammenhange mit dem Kulturleben der Völker. 4 Bde. Köthen 1860-1862.

8 Vgl. K. Schmidt: Aus meinem Leben, für meine Kinder niedergeschrieben in den Michaelisferien 1856 und von da ab weiter fortgesetzt. 1856. In: P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe. Diss. Halle 1949, S. 253-280; ders.: Dr. Karl Schmidt, Oberlehrer an dem herzoglichen Gymnasium in Köthen. In: Hrsg. v. J. B. Heindl: Galerie berühmter Pädagogen, verdienter Schulmänner, Jugend- und Volksschriftsteller und Komponisten aus der Gegenwart in Biographien und biographischen Skizzen. Bd. 2. München 1859, S. 320-334.

9 Vgl. [K. Schmidt]: Eine Weltanschauung. Wahrheiten und Irrtümer. Dessau 1850.

10 Vgl. E. Schläger: Bruno Bauer und seine Werke. In: Internationale Monatsschrift. Zeitschrift für allgemeine und nationale Kultur und deren Literatur. Bd. 1. Chemnitz 1882, S. 377-400.

11 Vgl. M. Kegel: Bruno Bauer und seine Theorie über die Entstehung des Christentums. Leipzig 1908; ders.: Bruno Bauers Übergang von der Hegelschen Rechten zum Radikalismus. Erlangen 1908.

さらに、1930年代において初期ブルーノ・バウアー研究が、初期ニーチェ研究の観点から実施された。その一つとしてD・ツィツェフスキーとE・ベンツの業績を挙げておこう。¹³ それらは、後期バウアーのキリスト教の起源を探求した論稿『キリストとカエサル』（1877年）を考察する際に、初期バウアーの著作『発見されたキリスト教』（1843年）との関連性を問題にした。バウアーの業績がニーチェの無神論の先行者とみなされた。バウアーの著作の意義が、ニーチェの思想的発展において措定された。

このような19世紀後半から前世紀初頭にかけての初期バウアーに関する研究は、その著作の哲学的分析に限定されていた。このような方法論をここですべて否定するのではない。しかし、バウアーの著作を同時代において位置づけ、その連関において考察するという作業が、この方法論には根本的に欠けている。周辺史料の読解という作業は、必要とされていない。したがって、周辺ヘーゲル左派、とりわけ初期シュミットに関する記述はほとんどない。

前世紀初頭から中葉にかけてE・バルニコルの業績が出現したことによって、このような状況が一変した。第二次大戦下を除き、彼はバウアー研究の最先端を担った。彼は1927年に、出版後すぐさま没収されたバウアーの著作『発見されたキリスト教』（1843年）を序文つきで再出版した。¹⁴ 本書の意義は、万物とその運動を自己意識に還元したことにある。「全世界の運動は、自己意識の運動として初めて現実的に対自的になる。それは、自己意識の統一という共同性に向かう」。¹⁵ 世界と歴史的世界の運動は、自己意識の運動として理解されて初めて、人間的理性によって把握された対自存在になる。逆に言えば、自己意識の運動として把握されないかぎり、それは混沌のままである。バルニコルは、バウアーの自己意識の哲学を的確に把握していた。

次にバルニコルは、ブルーノ・バウアーの宗教批判とキリスト教批判の意義をその思想的発展史だけではなく、ドイツ三月前期において位置づけようとした。¹⁶ この論争の本がドイツ三月前期においてどのように流通したのかについて、バルニコルは論述する。チューリッヒ政府によって没収された本書3,300冊すべてが、裁断機にかけられたのではない。バルニコルによれば、「チューリッヒ政府によって没収されたブルーノ・バウアーの著作は、保守派の手によってチューリッヒ各地にある。この政府が、多くの知識人によって閲覧されるために本書の幾つかの部数を送付した」。¹⁷ 本書が保守派を通じて、ヘーゲル左派にも渡っていたことが解明された。「没収されなかった少部数の『発見されたキリスト教』は、当時の優れた読者にも渡った。たとえば、J・フレーベル、K・マルクス、F・エンゲルス、W・マール、A・ルーゲ、M・シュティルナー、そしてK・シュミットである」。¹⁸ 多くの著名なヘーゲル左派が本書を読解することによって、この著作が彼らの思想形成史において刻印される。バウアーの著作がドイツ同時代史に位置づけられることによって、

12 Vgl. G. Runze: Bruno Bauer. Der Meister der theologischen Kritik. Neu Finkenburg b. Berlin 1931.

13 Vgl. D. Tschizewski: Revue d'Historie de la Philosophie, 3. Année, fasc. 3, Juill.-Sept. 1929, S. 1-27.; E. Benz: Nietzsches Ideen zur Geschichte des Christentums und der Kirche. Stuttgart 1938 [Neudruck: Leiden 1956], S. 104-121.

14 Vgl. B. Bauer: Das entdeckte Christentum. Eine Erinnerung an das 18. Jahrhundert und ein Beitrag zur Krisis des neunzehnten. Zürich u. Winterthur 1843 [Neuausgabe: Hrsg. v. E. Barnikol: Das entdeckte Christentum im Vormärz. Jena 1927. Neu herg. v. R. Ott: Hrsg. v. E. Barnikol: B. Bauer: Das entdeckte Christentum im Vormärz: Bruno Bauers Kampf gegen Religion und Christentum und Erstausgabe seiner Kampfschrift. Aalen 1989].

15 Ebenda, S. 114f.

16 Vgl. E. Barnikol: Bruno Bauers Kampf gegen Religion und Christentum und die Spaltung der vormärzlichen preussischen Opposition. In: Zeitschrift für Kirchengeschichte. Bd. 26. Stuttgart 1928, S. 1-34.

17 Ebenda, S. 10.

18 E. Barnikol: Bruno Bauer, der radikalste Religionskritiker und konservativste Junghegelianer. In: Das Altertum. Bd. 7. H. 1. Berlin 1961, S. 46.

同時に周辺ヘーゲル左派の研究が進展した。

さらに、P・ライマーとH-M・ザスが、バルニコルの死後そのバウアーに関する膨大な研究草稿を編集して公表した。¹⁹ 本書は、初期バウアーだけではなく、後期バウアーを同時代のドイツ精神史に埋め込もうとしている。この作業は、MEGA^②に似た作業をマルクス、エンゲルスではなく、ブルーノ・バウアーの思想形成過程において実施しようとする。この研究企図は壮大であるがゆえに、個人による研究能力をはるかに超えている。たとえば、初期バウアーの『発見されたキリスト教』に関する周辺史料として、先に引用したヘーゲル左派だけではなく、チューリッヒ政府の御用哲学者とみなされたブルンチェリーに関する基礎資料をも叙述対象としている。本研究の対象であるシュミットに関して言えば、彼がブルーノ・バウアーそしてヘーゲル左派と関与した大著『悟性と個人』(1846年)及び『世界観、その真理と錯誤』(1850年)等だけではなく、初期の小品『ウーリヒと教会』(1847年)にも言及している。²⁰

また、バルニコルだけではなく、彼から直接的な学問的指導を受けた研究者が、三月前期の神学思想と社会主義思想の関係を問題にした。まず、R・ゼーガーが後期敬虔主義と社会主義の関連性という観点から、初期エンゲルスの思想的発展を討究した。²¹ 次いで、W・ゼンスが無神論思想と社会主義の関連性という観点から、初期マルクスの思想的発展を討究した。²² バルニコルに影響を受けた新たな研究者は、ゼーガーとゼンスだけではない。その研究対象もまた、その当時から蓄積があったマルクス、エンゲルスに限定されていたわけではない。ヘーゲル左派研究において、新たな研究者が新たな研究対象を選択する。それがP・ヴェッツェルである。彼は初期シュミットの思想総体を、ヘーゲル左派の神学批判と社会変革思想の関連性というコンテクストに埋め込んだ。²³ そして後期シュミットのヘーゲル左派時代への回想録を含む著作目録が、その死に至るまでほぼ整備された。本書が初期シュミット研究の基本書であるという評価は、現在でもほぼ妥当している。初期シュミット研究史ならびにその著作目録作成という観点からして、それは画期的である。失われていたと見なされていたシュミットの自筆自叙伝が、本研究によって初めて読書界に公開された。²⁴ しかし、この博士論文は、第二次大戦中の社会的混乱において作成された。著作目録の作成という観点からすれば、本書は十分とは言えない。

3. 他のヘーゲル左派研究史

本節において、ブルーノ・バウアーだけではなく、他のヘーゲル左派研究史におけるシュミットについて言及してみよう。まず、マックス・シュティルナー研究史における初期シュミットについて触れてみよう。同時代のシュティルナー研究者あるいはその批判者も、シュミットの名前に言及している。哲学史家として現在でも著名なK・フィシャーは、シュティルナー思想における唯一者の概念の帰結として、シュミットの個人概念を取り上げる。「もちろん、[シュミットの]個人は思考の衰退であり、理念の破壊である。しかし、それは同時に、ソフィスト主義とその反対の意義の衰退である」。²⁵ シュミットが唯一者を展開させ、理念それ自体を破壊したと論難している。また、シュティルナー主義者、G・エドヴァルトもシュミットの個人

19 Vgl. E. Barnikol: Bruno Bauer. Studien und Materialien. Hrsg. v. P. Reimer u. H-M. Saß. Assen 1972.

20 Vgl. B. Bauer: Das entdeckte Christentum, a. a. O., S. 69.

21 Vgl. R. Seeger: Friedrich Engels. Die religiöse Entwicklung des Spät Pietisten und Frühsozialisten. Halle 1935.

22 Vgl. W. Sens: Karl Marx. Seine irreligiöse Entwicklung und antichristliche Einstellung. Halle 1935.

23 Vgl. P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe, a. a. O..

24 Vgl. ebenda, S. 253-279.

25 K. Fischer: Moderne Sophisten. In: Die Epigonen. Bd. 5. Leipzig 1848, S. 282.

概念に言及している。²⁶ 論難の対象ではあれ、シュミットはシュティルナーの思想的同伴者として取り扱われている。

さらに、19世紀後半においてM・ネットラオは、初期シュミットをM・バクーニン、シュティルナー等の無政府主義者の同時代人として考察している。「ケーテンには非常に自由な協会があった。バクーニンは1848年末までこの協会に対して友好的に接していた」。²⁷ バクーニンと、アンハルト・ケーテン公国のケーテンに在住していたシュミットとの関係が推測されている。さらにJ・H・マッケイが、シュティルナー研究史において現在なお参照されるべき研究書を執筆した。彼によれば、シュミットは「シュティルナーの最終的継続者たろうとした。・・・しかし、それを越えることがない」。²⁸ 彼はシュティルナーのエピゴーネンとして取り扱われている。多くのシュティルナー研究者が、シュミットに断片的に言及しているが、それ以上の本格的研究が現れることはなかった。

次に、旧ドイツ民主共和国を中心にした初期マルクス、初期エンゲルス研究との関連で、初期シュミット研究の意義を考察してみよう。周辺ヘーゲル左派が初期マルクス、エンゲルス研究史に登場するのは、A・コルニュの業績を以って嚆矢とする。²⁹ 彼の企図は、彼の著作だけではなく、周辺アルヒーフ史料、新聞、雑誌等を網羅的に渉猟することによって、彼らの思想を同時代精神史において定位することにあつた。初期マルクス、初期エンゲルスの思想圏を確定する作業が、中心ヘーゲル左派だけではなく、周辺ヘーゲル左派にまで及んでいる。そして、W・メンケがコルニュの意図をより精微に追求した。³⁰ 彼はその未完の大著『マルクス・クロニク』において、マルクスと関与する思想家つまり実質的にはヘーゲル左派を年代毎ではなく、日付ごとに整理しようとした。³¹ この両者の研究業績によって、周辺ヘーゲル左派の研究の土壌が形成された。旧ドイツ民主共和国における彼らの業績は、その後のMEGA^②の研究基盤を形成していた。

但し、社会主義の創立者に関係するかぎり、周辺ヘーゲル左派に関する研究が進展したにすぎない。彼らと関係しないヘーゲル左派に関する研究は、看過されてきた。したがって、シュミットに関する研究は進展しなかった。もちろん、ヘーゲル左派としての初期シュミットが、その著作を変名または無署名で出版したことも大きな役割を果たしている。しかし、旧東独におけるヘーゲル左派研究の限界を否定することは、できないであろう。

このような旧東独における事情は、旧西独にはあてはまらない。後者における青年ヘーゲル派研究は、初期マルクス、初期エンゲルスの思想圏を解明するという責務から解放されていた。もちろん、旧西独の研究者もヘーゲル左派の範疇からマルクス、エンゲルスを排除していたわけではない。しかし両者は、数多くのヘーゲル左派の一人でしかない。旧西独の多くの研究者は、ヘーゲル左派の思想をドイツ三月前期における近代社会認識と社会変革思想の一種としてみなしていた。問題の中心は、青年ヘーゲル派という概念それ自体がドイツ精神史において果たした役割の学問的解明にあつた。

概念の中核が問題にされて初めて、その周辺という問題が浮上してくる。その思想が解明されているヘー

26 Vgl. G. Edward: Die philosophischen Reaktionäre. „Moderne Sophisten von Kuno Fischer“. In: Die Epigonen. Bd. 4. Leipzig 1847, S. 151.

27 M. Nettelbladt: Der Vorfrühling der Anarchie. Ihre historische Entwicklung von den Anfängen bis zum Jahre 1864. Berlin 1925 [Neudruck: Glashütten im Taunus 1972], S. 177.

28 J. H. Mackay: Max Stirner. Sein Leben und sein Werk. Berlin u. Charlottenburg 1914 [Neudruck: Freiburg im Breisgau 1977], S. 174-175.

29 Vgl. A. Cornu: Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werk. 3 Bde. Berlin 1954-1968.

30 Vgl. W. Mönke: Die heilige Familie. Zur ersten Gemeinschaftsarbeit von Karl Marx und Friedrich Engels. Berlin 1972.

31 Vgl. W. Mönke: Karl Marx Chronik. Berlin 1972 u. 1985 (unveröffentlicht).

ゲル左派が少数であるかぎり、ヘーゲル左派という思想を解明することもほとんど不可能であるからだ。ヘーゲル左派の思想におけるスピノザの実体思想とフィヒテの主体思想の関連性を問う場合、スピノザ主義者と自認するヘスト、フィヒテ主義に近接しているブルーノ・パウアーを素材とするだけではその解答を求めることはできない。その周辺を含めた広範な研究対象が、未開拓の原野として残されている。L・ランブレヒトによれば、「青年ヘーゲル派の95パーセントは、伝記的にも理論的にも十分に検討されていない。同時代の意義深い代表者であっても、たとえばE・ユングニッツの生涯、及びL・ブールの正確な死亡日時すら我々は何も知らない」。³² ランブレヒトは、ヘーゲル左派の周縁を概念的に確定することによって、ヘーゲル左派ひいてはヘーゲル主義を19世紀ドイツ精神史に定位しようとした。さらに、W・エスバッハが大著『青年ヘーゲル派』によってこのような志向性を体系化した。³³ ヘーゲル左派が集団社会学の観点から考察されることによって、この学派の周辺に関する研究の意義が確定された。ブール、セリガ、オーピッツそしてシュミット等が、ブルーノ・パウアーの純粹批判の受容と大衆批判という観点から再検討されている。

次に、前世紀後半以降の初期シュミット研究史において、英語圏の動向が着目される。この観点から特筆されるべきことは、アメリカ合衆国・ヘーゲル学会長の肩書を有していたL・S・シュテペレヴィヒが青年ヘーゲル派に関するアンソロジーを編纂したことである。この著作選集には、ヘス、シュティルナー、フォイエルバッハ等の中心ヘーゲル左派だけではなく、エトガー・パウアー、シュミット等の周辺ヘーゲル左派を含む11人の思想家が取り上げられている。³⁴ シュミットの匿名の著作『悟性と個人』(1846年)が、部分的ではあれ初めて翻訳され、英語圏において紹介された。

ヘーゲル左派に対するシュテペレヴィヒの見識が、このヘーゲル左派選集の思想家に関する取捨選択において表現されている。シュトラウスの『イエス伝』(1836年)が、この選集において巻頭を飾っている。それは年代的観点からも、内容的観点からも問題ないであろう。これまでのヘーゲル左派選集と根本的に異なっている点は、シュミットの著作『悟性と個人』(1846年)がこの学派の重要著作に数え入れられていることである。「シュミットは、青年ヘーゲル派を通じてある真理に到達した。『私は私自身にすぎない』。青年ヘーゲル派と呼ばれた運動は、この控えめな言葉によって終焉に向かった」。³⁵ シュテペレヴィヒによって、ヘーゲル左派の引導者の役割がシュミットの著作に対して与えられている。

シュミットに関する論稿が、このシュテペレヴィヒ学派によって執筆される。まず、E・v・d・ルフトが、シュミットとフォイエルバッハの関係を明らかにする。³⁶ ルフトによれば、シュミットのフォイエルバッハ批判の思想がニーチェの思想を先取りしている。思想史における欠落がシュミットによって根底的に埋められる。彼は、シュミットのドイツ語の著作『悟性と個人』(1846年)と『愛なき愛の手紙』(1846年)を英語に翻訳する。³⁷ この二つの翻訳本によって、英語圏においてシュミットの思想がより完成された形で一般読書界に普及した。

また、ジョージタウン大学上級研究員、H-M・ザスが、ブルーノ・パウアーを中心にしたヘーゲル左派

32 L. Lambrecht: Die Identifikation der Junghegelianer mit der Französischen Revolution. Fragen und Materialien zu den Wegen ihres Rezeption. In: Dialektik. Bd. 17. Köln 1989, S. 138.

33 Vgl. W. Eßbach: Die Junghegelianer. Soziologie einer Intellektuellengruppe. München 1988.

34 Vgl. hrsg. v. L. S. Stepelevich: The Young Hegelians. An Anthology. New Jersey 1997 (Cambridge u. New York 1983).

35 Ebenda, S. 15.

36 Vgl. E. v. d. Luft: Karl Schmidts Feuerbachkritik. In: Hrsg. v. H-J. Braun usw.: Ludwig Feuerbach und die Philosophie der Zukunft. Berlin 1989, S. 657-689.

37 Vgl. übersetzt v. E. v. d. Luft: The Individual. North Syracuse, New York 2009; Übersetzt v. demselben: Love Letters without Love. North Syracuse, New York 2010.

総体を鳥瞰した論稿を公表した。彼はヘーゲル左派におけるシュミットの役割を以下のように述べている。すなわち、「短期間、ベルリン・自由人と交遊した若い神学者カール・シュミットは、シュティルナーよりも先に進む。彼は、『悟性と個人』において個人的な自己解放を構想することによって、他の革命モデルとの対立をやめる。解放の主体は、たんに個人でしかない」。³⁸ シュテペレヴィヒによるヘーゲル左派選集に影響を与えていたザスも、前者と同様にシュミットをヘーゲル左派の引導者とみなした。シュミットの思想が、ヘーゲル左派の総体において位置づけられた。

4. 後期シュミット研究史

最後に、後期シュミット研究史について触れてみよう。初期シュミットはその主要著作、たとえば『悟性と個人』（1846年）、『世界観、真理と錯誤』（1850年）を匿名で公表し、『愛なき愛の手紙』（1846年）を変名で公表した。検閲等が配慮されたからである。シュミットの名前が三月前期及び三月革命期において、ヘーゲル左派及びその周辺で喧伝されることはなかった。それと対照的に、後期シュミットは実名で『世界史的発展と諸民族の文化的生活との有機的連関における教育学の歴史』全4巻（1860-1862年）を公表することによって、教育思想史に確かな足跡を残す。読書界において著名になった後期シュミットに関する研究は、数多い。そのなかで、シュミット著作目録の作成という観点から後期シュミット研究史に触れてみよう。

この観点から特筆すべきは、A・アテンスペルガーの業績であろう。彼は、19世紀の教育学者、教育者の列伝を編纂し、シュミットをその一人とみなしている。さらに、その後期の思想的軌跡だけではなく、初期のそれにも配慮している。彼は、『ヴィーガント四季報』における匿名の論稿「ブルーノ・バウアーと現代の神学的人間主義の発展、批判と特性描写」（1845年）及びその後継誌『エピゴーネン』における匿名の論稿「ハインリッヒ・ハイネ」（1846年）をシュミットの筆になるものとみなした。³⁹ 本著作目録もこの指摘に基づき、それを追認している。また、19世紀末に執筆されたTh・マイセルバッハの論稿も、この指摘を継承している。⁴⁰ この両雑誌における二つの論稿は匿名で執筆されており、その著者性を確定するための決定的史料を持っているわけではない。しかし、アテンスペルガーとマイセルバッハの認定を覆す史料も保持していない。

さらに、19世紀後半だけではなく前世紀後半において、ケーテンの師範学校「ヴォルフガング・ランケ」の関係者が中心になって、教育学者としての後期シュミット論を数多く産出した。彼らは、19世紀後半の後期シュミット論を踏まえ、それを洗練した。まず、G・ホーエンドルフが後期シュミットの教育思想に関する論稿を執筆する。⁴¹ この業績は、後期シュミットの伝記的事実を踏まえたうえで、埋もれてきた教育思想を発掘した。とりわけ、『改革』（1857-1859年）におけるシュミットの論稿に依拠しながら、19世紀中葉のプロイセン教育改革史に言及している。その思想として、当時の有名な教育学者、F・A・W・ディスター

38 H-M. Sass: Bruno Bauer oder die Selbstermächtigung des Revolutionärs. In: Hrsg. v. K-M. Kodalle u. T. Reitz: Bruno Bauer (1809-1882). Würzburg 2010, S. 396.

39 Vgl. A. Attensperger: Dr. Karl Schmidt, Herzogl. Sächsischer Schulrath und Seminardirektor zu Gotha, geb. am 7. Juli 1819, gest. am 8. November 1864, dessen Leben und Wirken. In: Hrsg. v. F. W. Pfeiffer: Die Volksschule des 19. Jahrhunderts in Biographien hervorragender Schulmänner, Nürnberg 1872, S. 517.

40 Vgl. Th. Meißelbach: Karl Schmidt, Herzog. Sächs. Schulrat zu Gotha: mit Portrait in Lichtdruck. Gotha 1892, S. 7.

41 Vgl. G. Hohendorf: Köthener Gymnasialprofessor Dr. Karl Schmidt, der „neuesten und beste pädagogische Historiker“ der Diensterwegzeit. In: Hrsg. v. Pädagogische Hochschule „Wolfgang Ranke“: Kolloquium der Sektion Pädagogik. Köthen 1987, S. 34-42.

ヴェクの言葉が引用されている。「学校は生徒を自然的＝本来的に発展させる。これが教育の基礎である。学校はプロイセンの規制を受けない」。⁴² このディスターヴェクの思想と、シュミットの思想の同一性が主張されている。⁴³

次に、H・エーガーラントが後期シュミットの思想に焦点を当てながらも、三月前期と三月革命期における初期シュミットの思想的発展と伝記的事実を共に解明している。⁴⁴ この叙述形式は、前世紀初頭に形成され、旧東独において継承されてきた学術論文の研究形式に合致している。二世紀近い年月に渡るシュミットに関する第二次研究文献にも、配慮している。『ヴィーガント四季報』における匿名の論稿「ブルーノ・パウアーと現代の神学的人間主義の発展、批判と特性描写」(1845年)も、シュミットの筆として認定されている。⁴⁵ また、三月革命期においてケーテンで発行されていた『光の磨き』におけるシュミットの論稿にも言及している。この時期における彼の教育思想も紹介されている。⁴⁶

5. おわりに

これまで、ドイツそしてアメリカ合衆国の19世紀から今世紀に渡るシュミットの思想ならびにその著作目録に関する研究史を概観してきた。このような研究史を踏まえて、筆者が初期シュミットに関する論稿を公表し、シュミット著作目録を数次にわたって作成してきた。⁴⁷ 研究論文一般は、限定された主題と限定された史料に基づき生産される。シュミットに関する主題的論稿は、完全な著作目録に基づいて執筆されるのではない。論文執筆の過程でその著作目録も、補訂を余儀なくされている。先行する研究論文の渉猟及び歴史的史料の新たな発掘によって、本著作目録も将来、再び改訂されるであろう。未来の研究は、現在の研究業績を乗り越えて達成されるはずである。本著作目録、そして本研究もまた歴史的現在という被限定性を免れていない。しかし、本著作目録は現段階におけるシュミット研究の水準を端的に表現している。

末筆ながら、復刻された文献を除き、19世紀の文献には所在図書館名が記載されている。その理由は、新たな研究者による文献収集を容易にすると同時に、筆者が複写依頼をした図書館に対して学問的敬意を表すことにある。

42 F. A. W. Diesterweg: Sämtliche Werke. Bd. 15. Berlin 1984, S. 205.

43 Vgl. G. Hohendorf: Köthener Gymnasialprofessor Dr. Karl Schmidt, a. a. O., S. 39.

44 Vgl. H. Egerland: Der Pädagoge Karl Schmidt (1819-1864). Ein Lebensbild. In: Hrsg. v. Landeshauptarchiv Sachsen-Anhalt. Mitteilungen des Vereins für Anhaltische Landeskunde. 1. Jg. Köthen 1992, S. 115-130.

45 Vgl. ebenda, S. 117.

46 Vgl. ebenda, S. 118.

47 田村伊知朗「歴史的世界の把握をめぐる思想史的考察——初期カール・シュミット (Karl Schmidt 1819-1864年) のヘーゲル左派批判を中心にして (「カール・シュミット著作目録」添付)」『法政大学教養部紀要』第121号, 2002年, 35-56頁; 田村伊知朗「初期近代における世界把握の不可能性に関する政治思想史的考察——初期カール・シュミット (Karl Schmidt 1819-1864年) の政治思想を中心にして」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』第55巻第2号, 2005年, 73-80頁; 田村伊知朗『近代の揚棄と社会国家——初期カール・シュミットと初期カール・ナウヴェルクの政治思想』萌文社, 2005年, 71-76頁参照。

Bibliographie der Veröffentlichungen von Karl Schmidt [1845–1863]

1845

1. Wigand's Vierteljahrsschrift. Leipzig: Otto Wigand.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

1. 1 [Anonym]: „Bruno Bauer oder die Entwicklung des theologischen Humanismus unsrer Tage. Eine Kritik und Charakteristik“.

Bd. 3, S. 52–85.

[Quelle: A. Attensperger: „Dr. Karl Schmidt, Herzogl. Sächsischer Schulrath und Seminaldirektor zu Gotha, geb. am 7. Juli 1819, gest. am 8. November 1864, dessen Leben und Wirken“. In: Hrsg. v. F. W. Pfeiffer: Die Volksschule des 19. Jahrhunderts in Biographien hervorragender Schulmänner. Nürnberg 1872, S. 517.]

1846

1. Die Epigonen. Leipzig: Otto Wigand.

[Neudruck: Glashütten im Taunus 1972]

1. 1 [Anonym]: „Heinrich Heine“.

Bd. 2, S. 7–60.

[Quelle: A. Attensperger: „Dr. Karl Schmidt, a. a. O., S. 517; P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe. Diss. Jena 1946, S. 219.]

1. 2 [Anonym]: „Spaziergänge durch Goethe's Faust“.

Bd. 3, S. 67–120.

[Quelle: A. Attensperger: „Dr. Karl Schmidt, a. a. O., S. 517; P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe, a. a. O., S. 249.]

2. Evangelische Kirchenzeitung. Hrsg. v. E. W. Hengstenberg. Berlin: Ludwig Oehmigke.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2.1 [Anonym]: „Die neue Gestaltung der Philosophie“

Nr. 97, 5. 12, S. 854–856; Nr. 98, 9. 12, S. 860–864.

[Quelle: G. Edward: „Die philosophischen Reaktionäre. „Die modernen Sophisten von Kuno Fischer“. In: Die Epigonen. Bd. 4. Leipzig 1847, S. 151.]

3. [Anonym]: Das Verstandesthum und das Individuum. Leipzig: Otto Wigand, 308 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

[Quelle: E. Barnikols unveröffentlichte Manuskripte im IISG § 98, S. 1.]

4. [Karl Bürger, Pseudonym für K. Schmidt]: Liebesbriefe ohne Liebe. Leipzig: Otto Wigand, 168 S.

[Standort: British Library]

[Quelle: K. Schmidt: „Aus meinem Leben, für meine Kinder niedergeschrieben in den Michaelisferien 1856 und von da ab weiter fortgesetzt“. In: P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe, a. a. O., S. 262.]

5. Der Prediger in der Jetztzeit. Eine Abhandlung. Jesus Christus. Eine Predigt. Dessau: Julius Fritsche, 29 S.

[Standort: Universitäts- u. Landesbibliothek Sachsen-Anhalt, Halle]

1847

1. Luther. Eine Charakteristik. Nebst einem Anhang: Luther und wir. Dessau: Julius Fritsche, IV, 83 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2. Biographisches Denkmal Eduard Hartmann's. Konsistorial=Rath zu Köthen. Köthen: Wittwe Aue, 16 S.

[Standort: Universitäts- u. Landesbibliothek Sachsen-Anhalt, Halle]

3. Carolus Schmidt: De ratione, quae intersit inter philosophiam et religionem christianam. Diss. Halle, 24 S.

[Standort: Universitätsarchiv, Halle]

4. Uhlich und die Kirche. Eine Kritik. Potsdam: Harvath, 56 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

1848

1. Die Adresse zu den Adressen. Auch eine Adresse an Uhlich. Potsdam: Otto Janke, 14 S.

[Standort: British Library]

2. Herzog Heinrich. Eine Gedächtnißrede. Dessau: Julius Fritsche, 14 S.

[Standort: British Library]

3. Die Lichtputze. Ein höchst nothwendiges Organ für die Zeit. Hrsg. v. A. v. Behr. Köthen: H. Neubürger.

[Standort: Universitätsbibliothek, Leipzig]

3. 1 Karl Schmidt: „Trennung der Kirche vom Staate“.

Nr. 17, 28. 7., S. 140-142.

3. 2 Karl Schmidt: „Reformation der Schulen“.

Nr. 18, 1. 8., S. 148-150; Nr. 19, 4. 8., S. 155-158.

3. 3 Karl Schmidt: „Sonntagsschulen“.

Nr. 20, 8. 8., S. 165-166.

3. 4 Karl Schmidt: „Ein Brief aus Frankfurt. Frankfurt, den 29. August“.

Nr. 29, 8. 9., S. 237-240; Nr. 30, 12. 9., S. 246-248; Nr. 31, 15. 9., S. 255-256; Nr. 33, 22. 9., S. 269-271.

3. 5 Karl Schmidt: „Eingesandtes. Leichenrede am Grabe des Volksblattes und seines muthigen Mitarbeiters aus Büßdorf“.

Nr. 37, 6. 10., S. 301-302.

3. 6 Karl Schmidt: „§. 24. der Verfassung, sein Vertheidiger und seine Gegner“.

Nr. 55, 8. 12., S. 443-447.

1849

1. Jahrbücher der freien deutschen Akademie. Im Auftrag des zur Gründung einer freien akademischen Universität gebildeten Ausschusses. Hrsg. v. K. Nauwerck u. L. Noack. Frankfurt a. M.: J. B. Meidinger.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

1. 1 K. Schmidt: „Die Entwicklung der christlichen Lehre. Eine Charakteristik der schöpferischen Persönlichkeiten im Christenthum“.

Bd. 1, H. 1, S. 39–128.

1850

1. Eine Weltanschauung. Wahrheiten und Irrtümer. Dessau: Julius Fritsche, VI, 340 S.

[Standort: Universitätsbibliothek, Columbia Universität, New York]

1852

1. Anthropologische Briefe. Die Wissenschaft vom Menschen in seinem Leben und in seinen Thaten. Allen Gebildeten, vorzüglich allen Lehrern und Erziehern gewidmet. Dessau: Moritz Katz, XIX, Taf. II, 563 S.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2. Zu den öffentlichen Prüfungen der Hauptschule zu Köthen. Hrsg. v. A. Cramer. Köthen: Paul Schettler.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2. 1 Karl Schmidt: „Über die verschiedenen Erziehungsmittel in der Denk-, der Willens- und der Gefühlswelt. Pädagogische Gedankenspäne“, S. 3–32.

3. Über die verschiedenen Erziehungsmittel in der Denk-, der Willens- und der Gefühlswelt: Pädagogische Gedankenspäne vom Gymnasiallehrer. Köthen: Paul Schettler, 42 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

1853

1. Die Harmonie der Welten. Leipzig: Carl Geibel, XII, 221 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2. Theologische Zeitfragen, beantwortet von Dr. Karl Schmidt, Gymnasiallehrer zu Köthen. Köthen: Paul Schettler, 60 S.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

1854

1. Buch der Erziehung. Die Gesetze der Erziehung und des Unterrichts, gegründet auf die Naturgesetze des menschlichen Leibes und Geistes. Briefe an Eltern, Lehrer und Erzieher. Köthen: Paul Schettler, XIV, Taf. II, 536 S.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

1856

1. Briefe an eine Mutter über die Leibes- und Geistes-Erziehung ihrer Kinder. Köthen: Paul Schettler, VIII, 160 S.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2. Aus meinem Leben, für meine Kinder niedergeschrieben in den Michaelisferien 1856 und von da ab weiter fortgesetzt. In: P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe, a. a. O., S. 253-280.

1857

1. Gymnasial-Pädagogik. Die Naturgesetze der Erziehung und des Unterrichts in humanistischen und realistischen gelehrten Schulen. Köthen: Paul Schettler, XII, 288 S.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2. Die Reform. Pädagogische Vierteljahrsschrift. Hrsg. v. C. F. Lauckhard. Leipzig: J. J. Weber.

[Standort: Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung des Deutschen Instituts für Internationale Pädagogische Forschung, Berlin]

2. 1 K. Schmidt: „Das Kennen und das Können“.

Bd. 1, H. 2, S. 136-139.

1858

1. Die Reform. Pädagogische Vierteljahrsschrift, a. a. O..

[S. 1857-2]

1. 1 K. Schmidt: „Die Welt der Gefühle und Triebe und die Erziehung dieser Welt“.

Bd. 2, H. 1, S. 53-58.

1859

1. K. Schmidt: „Dr. Karl Schmidt, Oberlehrer an dem herzoglichen Gymnasium in Köthen“. (Autobiographie). In: Hrsg. v. J. B. Heindl: Galerie berühmter Pädagogen, verdienter Schulmänner, Jugend- und Volksschriftsteller und Komponisten aus der Gegenwart in Biographien und biographischen Skizzen. Bd. 2. München: Joseph Anton Finsterlin, S. 320-334.

2. Die Reform. Pädagogische Vierteljahrsschrift, a. a. O..

[S. 1857-2]

2. 1 K. Schmidt: „Der Lehrer muss Geschichte und Pädagogik studiert haben und studieren“.

Bd. 3, H. 1, S. 31-33.

2. 2 K. Schmidt: „Die einseitigen Erziehungssysteme in der Gegenwart“.

Bd. 3, H. 1, S. 33-36.

1860

1. Die Geschichte der Pädagogik in weltgeschichtlicher Entwicklung und im organischen Zusammenhange mit dem Kulturleben der Völker. 4 Bde. Köthen: Paul Schettler 1860–1862.

[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

Bd. 1. Die Geschichte der Pädagogik in der vorchristlichen Zeit, XII, 496 S.

1861

1. Die Geschichte der Pädagogik in weltgeschichtlicher Entwicklung, a. a. O..

[S. 1860–1]

Bd. 2. Die Geschichte der Pädagogik in der christlichen Zeit. 1. Abt. Die Geschichte der Pädagogik von Christus bis zur Reformation, XII, 446 S.

Bd. 3. Die Geschichte der Pädagogik in der christlichen Zeit. 2. Abt. Die Geschichte der Pädagogik von Luther bis Pestalozzi, XVI, 699 S.

2. Das Ideal des deutschen Lehrers. Rede zur Einleitung der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung in Köthen. Langensalza: Comptoir, Taf. X, 15 S.

[Standort: Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung des Deutschen Instituts für Internationale Pädagogische Forschung, Berlin]

3. Hrsg. v. K. Schmidt: Die Erziehung der Gegenwart. Beiträge zur Lösung der Aufgabe mit Berücksichtigung von Friedrich Fröbels Grundsätzen. 1. Jg. Berlin: Th. Chr. Fr. Enslin.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

3. 1 K. Schmidt: „Die Entwicklung der christlich=humanen Erziehung in Deutschland“.

Nr. 1, 1. 4., S. 1–3.

3. 2 Karl Schmidt: „Baustein zur Erziehung der Gegenwart. Erster Artikel“.

Nr. 2, 15. 4., S. 10–12.

3. 3 Karl Schmidt: „Übersicht über die Verbreitung der Kindergärten in der Gegenwart“.

Nr. 2, 15. 4., S. 13–15.

3. 4 K. Schmidt: „Harmonische Erziehung des Leibes und Geistes“.

Nr. 3, 1. 5., S. 24.

3. 5 Karl Schmidt: „Der deutsche Lehrer. Einleitungsvortrag bei der zwölften allgemeinen deutschen Lehrer=Versammlung“.

Nr. 5, 1. 6., S. 33–37.

3. 6 Karl Schmidt: „Die allgemeine deutsche Lehrer=Versammlung“.

Nr. 5, 1. 6., S. 43–44.

3. 7 Karl Schmidt: „Baustein zur Erziehung der Gegenwart. Zweiter Artikel: Die Erziehung der Denkwelt“.

Nr. 9, 1. 8., S. 65–67.

3. 8 Karl Schmidt: „Baustein zur Erziehung der Gegenwart. Dritter Artikel: Die Erziehung der Wollenswelt“.

Nr. 10, 15. 8., S. 73–75.

3. 9 Karl Schmidt: „Baustein zur Erziehung der Gegenwart. Vierter Artikel. Die Erziehung der Gefühlswelt“.
Nr. 12, 15. 9., S. 93-96.
3. 10 Karl Schmidt: „Anthropologische Pädagogik“.
Nr. 14, 15. 10., S. 114-115.
3. 11 Karl Schmidt: „Baustein zur Erziehung der Gegenwart. Fünfter Artikel. Männliche und weibliche Erziehung“.
Nr. 15, 1. 11., S. 117-121.
3. 12 Karl Schmidt: „Die Verlagsbuchhandlung von Otto Spamer in Leipzig und ihre illustrierten Jugend=, Haus=, Schul=, Volks= Bibliotheken. I“.
Nr. 15, 1. 11., S. 127-128.
3. 13 Karl Schmidt: „Die Lebensgesetze des Gehirns“.
Nr. 16, 15. 11., S. 132-133.
3. 14 Karl Schmidt: „Die Verlagsbuchhandlung von Otto Spamer in Leipzig und ihre illustrierten Jugend=, Haus=, Schul=, Volks= Bibliotheken. II“.
Nr. 17, 1. 12., S. 142-144.
3. 15 Karl Schmidt: „Erinnerung und Mahnungen an die Eltern bei Anschaffung der Weihnachtsgeschenke für ihre Kinder“.
Nr. 18, 15. 12., S. 151-152.
3. 16 Karl Schmidt: „Literarisches“.
Nr. 18, 15. 12., S. 152.

1862

1. Die Geschichte der Pädagogik in weltgeschichtlicher Entwicklung, a. a. O..
[S. 1860-1]
Bd. 4. Die Geschichte der Pädagogik von Pestalozzi bis zur Gegenwart, XVI, 814 S.
2. Hrsg. v. K. Schmidt : Die Erziehung der Gegenwart, a. a. O., 2. Jg.
[S. 1861-3]
2. 1 Karl Schmidt: „Was will die Erziehung der Gegenwart?“.
Nr. 1, 1. 1., S. 1-4.
2. 2 Karl Schmidt: „Zur anthropologischen Pädagogik“.
Nr. 1, 1. 1., S. 7-8.
2. 3 Karl Schmidt: „Individualität und individuelle Erziehung“.
Nr. 3, 1. 2., S. 17-21.
2. 4 Karl Schmidt: „Für die Familienbibliothek“.
Nr. 3, 1. 2., S. 23-24; Nr. 8, 15. 4., S. 67-68; Nr. 15, 1. 8., S. 122-124.
2. 5 Karl Schmidt: „Die Geschichte der Pädagogik. Eine Selbstanzeige“.
Nr. 5, 1. 3., S. 33-37.
2. 6 Karl Schmidt: „Die Geschichte des Weibes“.

Nr. 7, 1. 4., S. 53-56; Nr. 9, 1. 5., S. 69-72; Nr. 11, 1. 6., S. 85-87.

2. 7 Karl Schmidt: „Die Entwicklung der neueren Pädagogik und der Kindergarten. Ein öffentlicher Vortrag“.

Nr. 12, 15. 6., S. 93-96; Nr. 13, 1. 7., S. 101-103.

2. 8 Karl Schmidt: „Über Charakterbildung. Ein Vortrag, gehalten auf der allgemeinen deutschen Lehrerversammlung zu Gera“.

Nr. 14, 15. 7., S. 109-112.

2. 9 Karl Schmidt: „Die Verlagsbuchhandlung von Otto Spamer in Leipzig und ihre illustrierten Jugend=, Haus=, Schul=, Volks= Bibliotheken“.

Nr. 22, 15. 11., S. 177-179.

2. 10 Karl Schmidt: „Die Schule als Erziehungsanstalt“.

Nr. 24, 15. 12., S. 189-191.

2. 11 Karl Schmidt: „Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften“.

Nr. 24, 15. 12., S. 191-192.

1863

1. Die Geschichte der Volksschule und des Lehrer=Seminars im Herzogthum Gotha. Ein Vortrag am Geburtstage Sr. Hoheit des Herzogs im Seminar zu Gotha. Anhang: 1. Vollständiger Abdruck des Volksschulgesetzes für das Herzogthum Gotha vom 1. Juli 1863. 2. Verordnung, die weitere Ausführung einiger Bestimmungen des Volksschulgesetzes betreffend. 3. Instruktion für die Bezirksschulinspektoren im Herzogthum Gotha. 4. Entwurf zu einem Religionsunterricht für die Volksschulen des Herzogthums Gotha. Köthen: Paul Schettler, 149 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2. Zur Reform der Lehrerseminare und der Volksschule. Köthen: Paul Schettler, 148 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

3. Die Geschichte der Erziehung und des Unterrichts. Für Schul= und Predigtamtskandidaten, für Volksschullehrer, für gebildete Eltern und Erzieher. Köthen: Paul Schettler, VII, 470 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

4. K. Schmidt: „Was hat die Schule zur Erweckung und zur Pflege der Vaterlandsliebe zu tun?“. In: H. Kaiser: Rheinreise in Gesellschaft mehrerer Lehrer aus Thüringen gemacht und Aufenthalt in der Lehrerversammlung zu Mannheim. Langenzalza: Comptoir, S. 28-36.

[Standort: Forschungsbibliothek, Gotha]

5. Gerechtigkeit erhöht ein Volk, aber die Sünde ist der Leute Verderben. Eine wahre Geschichte. Langenzalza: Geißler, 112 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

6. Allgemeine deutsche Lehrerzeitung. Hrsg. v. A. Berthelt. Leipzig: Julius Klinkhardt.

[Standort: Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung des Deutschen Instituts für Internationale Pädagogische Forschung, Berlin]

6. 1 K. Schmidt: „Über die Fortbildung der Volksschullehrer“.

Bd. 15, H. 41, 11. 10., S. 353-356.

6. 2 K. Schmidt: „Über Nationalerziehung“.

Bd. 15, H. 45, 8. 11., S. 389-398.

[付記] 本研究は、2012年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C，課題番号22530192「B・パウアーの大衆批判——その歴史的位相と後期近代的位相」）による研究成果の一部である。

(函館校教授)